JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2019年
No. 94
2019年1月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2019 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

東京性教育研修セミナー2018報告 …… 1
多様な性のゆくえ㉑…… 12
思いこみのめがね⑩…… 13
性教育の現場を訪ねて㉒…… 14
今月のブックガイド…… 16
JASEインフォメーション …… 17

◆東京性教育研修セミナー 2018 報告

青少年の性行動の不活性化と多様性

「第８回 青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像

2018 年 11 月 23 日（金･祝日）午後１時より東京千代田区の一ツ橋センタービルにおいて、「青少年の性行動の不活性化と多様性」をテーマに、日本性教育協会の主催で、東京性教育研修セミナーが開催された。このセミナーは、2017 年度に実施された「第８回 青少年の性行動全国調査」の結果を分析したものである。ここでは、６氏の講演の概要を報告する。

はじめに

日本性教育協会（JASE）では、1974 年よりほぼ６年おきに全国の青少年の性行動・性意識について調査を行ってきた。今回のセミナーでは、2017 年度に行われた第８回調査の分析をもとに、性行動と性意識など青少年の性の現状が５名の調査委員から報告された。

また、日本とほぼ同一の質問紙で調査された中国の青少年の性行動・性意識の実態も報告された。

まず、片瀬一男・東北学院大学教養学部教授が「第８回 青少年の性行動全国調査の概要」をテーマに基調講演を行った。続いて、林雄亮・武蔵大学社会学部准教授が「青少年の性はどう変わってきたか」、石川由香里・活水女子大学健康生活学部教授が「性行動と性規範･ ジェンダー規範の関連性を探る」、羽渕一代･弘前大学人文社会学部教授が「青少年の性暴力」、永田夏来・兵庫教育大学大学院学校教育科講師が「性教育はどう役立っているか」をテーマに講演を行った。その後、特別講演を楊雄・上海社会科学院社会学研究所長が「中国／北京・上海・広州の青少年の性意識と性行動調査」というテーマで行った。

６氏の講演後、休憩をはさんで加藤秀一・明治学院大学社会学部教授を座長にディスカッション・Q＆A

が行われた。テーマは「若者の性行動は日本・中国でどう変わってきたか」。

◆基調講演◆

第８回 青少年の性行動全国調査の概要

東北学院大学の片瀬一男教授は、「青少年の性行動全国調査の概要」を次の様に述べている。

「本日の報告は、今回で第８回を迎える青少年の性行動全国調査の主要な結果を過去の調査結果と比較する形で示し、テーマごとに分析・考察を加えたものです。この調査は、1974 年からほぼ６年おきに全国の中学・高校・大学生を対象に行われてきました。ただし、中学生を調査対象に加え、調査地点を町村にまで拡張したのは、1987 年の第３回調査からです。６年おきに調査が実施されてきたのは、６年たつと中学生・高校生の母集団が入れ替わるので、この間隔で調査を行うことで、日本の青少年の性行動を切れ目なく把握できるためです」。

そのうえで、①調査内容、②調査の対象と方法などを紹介された。その骨子は以下の通りである。

①調査内容

今回の調査から、中学生、高校生、大学生で調査票を分け、３種類の調査票を用意。その主な内容は以下のとおりである。なお、質問のうち中学生や高校生には質問をしていないものもある。

(1) 性経験・性行動

射精・月経、性的関心、告白経験、デート経験、キス経験、性交経験、マスターベーション経験

(2) 性規範・性意識

性に関するイメージ、 性別意識（性別役割意識、性差意識、結婚観など）、性規範（愛情のない性交・金品授受による性交・恋人以外との性交への態度など）

(3) 性をめぐる問題

セクシュアル・ハラスメント（経験の有無と相手）、デート・ヴァイオレンス

(4) 性教育と性知識・情報

性教育（学校の性教育で学習した項目、性教育への評価）、性知識への関心（性について知りたいこと）、性情報源（友人、学校・教師、メディアなど）、性知識（避妊や性感染症などに関する知識）、性の悩み

(5) 友人関係

学校の友人関係のイメージ、友人と街に遊びに行く頻度、よく話をする同性・異性の友人の有無、付き合っている人・性交をしている人の有無、友人の性経験への関心、性に関する会話の程度

(6) 家族関係

家庭のイメージ、父母との会話頻度、母親の就労、兄弟構成、家庭にある本の冊数、居住形態、父母学歴、中学３年次の父母職業

(7) 学校・学業関係

休日の学習時間、運動時間など

(8) メディア利用状況ほか

専用のテレビ・ビデオ・パソコンの保有、携帯電話の利用頻度、インターネット（SNS も含む）の利用状況、アルバイト頻度

②調査の対象と方法

今回の調査では、従来の調査との継続性も考慮しながら、都市規模（大都市・中都市・町村）ごとに調査地点を 43 地点選定した。その内訳は人口が 100 万人を超える大都市６地点（札幌市、仙台市、東京都特別区部、京都市、大阪市、神戸市）、その他の中都市 33 地点（帯広市、釧路市、弘前市、足利市、小山市、流山市、三鷹市、小金井市、多摩市、長野市、長久手市、豊橋市、彦根市、京田辺市、吹田市、和泉市、貝塚市、御坊市、高槻市、堺市、西宮市、奈良市、和歌山市、田辺市、玉野市、岡山市、松山市、今治市、鳥取市、米子市、宗像市、長崎市、熊本市）、町村４地点（北海道、栃木県、滋賀県、鳥取県）である。

次に、これらの地点から地域規模や学校種別などを考慮して中学 23 校、高校 20 校を選び、自記式集合調査を実施した。

具体的には、中学校および高等学校においては、日本性教育協会から学生調査員が学級に赴いて、封筒に入れたまま調査票を配布し、調査の趣旨や記入上の注意を説明。その場で調査票に記入させ、封筒に入れて回収。プライバシー保護のため、調査員は生徒たちと面識のない者を派遣し、原則、調査校の担当者（担任等）にはその場から退出していただいた。大学は、上

記の地点のうち、大都市および中都市のなかから43校を選び、調査協力に同意した大学教員が教室で封筒に入った調査票を配布し、調査の趣旨を説明、調査に同意した学生が原則としてその場で調査票に記入し、封入・密封のうえ提出してもらった。

調査は、2017年6月から12月にかけて実施された。中学生4,449名、高校4,282名、大学生4,194名、合計12,925名から調査票を回収することができた。

片瀬氏は、基調講演を次の様に結んだ。

「今回の第8回調査は、日本青少年研究所や上海社会科学院の協力を得て日中比較もできる設計となっている。今後は今回の報告をもとにさらに詳細な分析を行い、来年（2019年）夏にはその結果を『「若者の性」白書――第8回青少年の性行動全国調査報告』（仮）という書籍として刊行する予定でいる」。

◆講演①◆

青少年の性はどう変わってきたか

武蔵大学の林雄亮准教授は、「青少年の性はどう変わってきたか」をテーマに講演をされた。

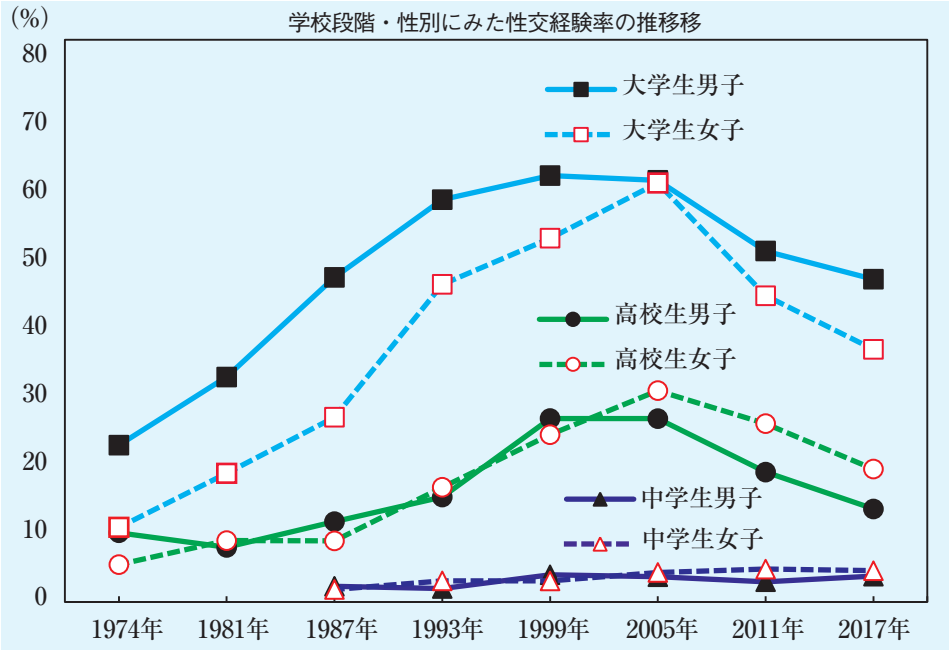
まず、第7回調査（2011年）までの青少年の性の変化について触れ、性行動・性意識の消極化と分極化が進んできたことを指摘した。主要な性行動として、デート経験、キス経験、性交経験をとりあげ、第1回調査から、この43年の間に学校別・性別にどのような変化が起こってきたかを報告された。

ここでは、性交経験の推移と性の心理的側面ともういうべき性的なことに関心をもった経験の有無についての変化について、その内容を紹介する。

①性交経験率

性交経験率の推移は、いずれの学校段階、性別にみてもキス経験のそれと類似している。そこで具体的な経験率に着目すると、大学生男子は、ピーク時の第6回調査（2005年）において63.0%だったのが第7回調査（2011年）では53.7%にまで大幅に低下し、第8回調査（2017年）ではさらに47.0%にまで低下した。大学生女子における経験率の低下はさらに著しく、同じくピーク時の第6回調査（2005年）において62.2%だったのが、第7回調査（2011年）では46.0%、第8回調査では36.7%にまで下がっている。また第6回調査（2005年）以降、性交経験率の性差も拡大しており、第7回調査（2011年）では約7ポイント、第8回調査（2017年）においては約10ポイントの差が生じている。

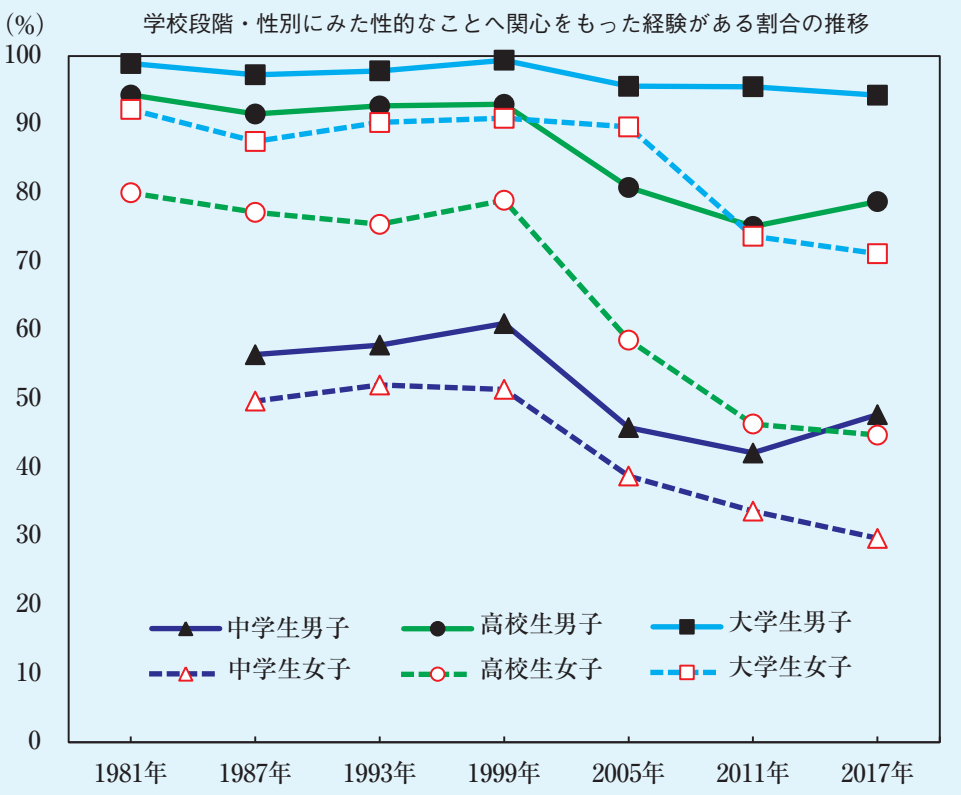
高校生の性交経験率についても、ピーク時の第6回調査（2005年）からの低下が確認できる。男子は第6回調査（2005年）の26.6%から第8回調査（2017年）では14.6%と半減し、女子も第6回調査（2005年）の30.3%から第8回調査（2017年）では19.3%にまで低下している。また第6回調査（2005年）以降、高校生では女子の経験率が男子よりも高い状態が続いている。



中学生の性交経験率は、中学生が調査対象となった第3回調査（1987年）以降、常に5％を下回っている。また男子は第5回調査（1999年）以降、女子は第6回調査（2005年）以降、ほぼ安定した割合を保っている。

②「性的関心」の経験率

性の心理的側面としての「性的なことに関心をもった経験



がある」という割合の推移について近年の動向に注目して分析している。「性的関心」経験については高校生、大学生は第２回調査（1981 年）以降、中学生は第３回調査（1987 年）以降に設けられた質問項目である。

大学生については、男子の割合は常に９割を超えており大きな変化はみられない。一方、女子では第６回調査（2005 年）までは９割前後の割合で関心をもった経験があると回答されていたのに対し、第７回調査（2011 年）ではそこから約 16 ポイント、第８回調査（2017 年）ではさらに約３ポイント低下している。これによって性差は大きく広がり、第８回調査（2017 年）では約 23 ポイントの差が生じている。

高校生については、第２回調査（1981 年）から第５回調査（1999 年）にかけて、男子で９割を超える程度、女子で８割をやや下回る程度で安定していたが、第６回調査（2005 年）以降に男女ともに性的関心をもった経験が大きく低下している。その傾向は女子で著しく、男子の経験率が第８回調査（2017 年）において上昇したことも受け、第８回調査（2017 年）では約 34 ポイントもの性差がみられている。

中学生については、第３回調査（1987 年）から第５回調査（1999 年）にかけて男子で６割前後、女子で５割前後で安定していたが、それ以降は高校生と同様に大きく低下してきた。またこれも高校生と同様に、第７回調査（2011 年）から第８回調査（2017 年）にかけて男子の経験率が上昇したのに対し、女子の経験率はさらに低下している。

林氏は、最後に、レジメで次の様に述べている。〈ここまで第１回調査（1974 年）からの集計結果をもとにして、特に第８回調査（2017 年）で新たに確認された状況に着目しながら、青少年の性に関する変化を記述的に追ってきた。

結果を要約すると、第１に、第７回調査（2011 年）において確認された性行動の消極化が、全体としてさらに進行している。特に大学生の性行動経験率は男女ともに前回よりもさらに低下しており、キスや性交については 30 年前の水準に近くなっている。またキスや性交については、新しい世代ほど比較的早期の経験が減少しており、性行動経験の遅延が生じている。

第２に、性行動・性意識における性差の拡大という新たな様相が確認され始めている。性行動の発達における男女の違いは新しい世代ほど大きく、2000 年代生まれでは 1990 年代、1980 年代生まれと比べてデート・キス・性交経験の女子先行の状況が際立っている。デート・キス・性交などの相手をともなう性行動の経験率における性差の拡大は、相手が異性であると仮定した場合、男女のマッチングに変化が生じていることを示唆している。つまり性交を例にすれば、性行動の活発な一部の層が、それまでに性交経験のない複数の異性と関係を持つことで経験率の性差が生じるということである。この仮説が支持されるならば、第８回調査（2017 年）において性交経験率がさらに大きく低下した大学生女子の内部で、活発層と不活発層への分極化が進行していると考えることもできる。

第３に、性の心理的側面ともいえる性的関心については、男女ともに遅れが生じているという意味での消極化と、新しい世代ほど性差が拡大しているという分

付表　主要な性行動経験率　（%）

経験の種類	調査年度	1974年	1981 年	1987 年	1993 年	1999 年	2005 年	2011 年	2017 年
デート	大学男子	73.4	77.2	77.7	81.1	81.9	80.2	77.1	71.8
	大学女子	74.4	78.4	78.8	81.4	81.9	82.4	77.0	69.3
	高校男子	53.6	47.1	39.7	43.5	50.4	58.8	53.1	54.2
	高校女子	57.5	51.5	49.7	50.3	55.4	62.2	57.7	59.1
	中学男子	—	—	11.1	14.4	23.1	23.5	24.7	27.0
	中学女子	—	—	15.0	16.3	22.3	25.6	21.8	29.2
	調査年度	1974 年	1981 年	1987 年	1993 年	1999年	2005 年	2011 年	2017 年
キス	大学男子	45.2	53.2	59.4	68.4	72.1	73.7	65.6	59.1
	大学女子	38.9	48.6	49.7	63.1	63.2	73.5	62.2	54.3
	高校男子	26.0	24.5	23.1	28.3	41.4	48.4	36.0	31.9
	高校女子	21.8	26.3	25.5	32.3	42.9	52.2	40.0	40.7
	中学男子	—	—	5.6	6.4	13.2	15.7	13.9	9.5
	中学女子	—	—	6.6	7.6	12.2	19.2	12.4	12.6
	調査年度	1974 年	1981年	1987年	1993年	1999 年	2005 年	2011 年	2017 年
性交	大学男子	23.1	32.6	46.5	57.3	62.5	63.0	53.7	47.0
	大学女子	11.0	18.5	26.1	43.4	50.5	62.2	46.0	36.7
	高校男子	10.2	7.9	11.5	14.4	26.5	26.6	14.6	13.6
	高校女子	5.5	8.8	8.7	15.7	23.7	30.3	22.5	19.3
	中学男子	—	—	2.2	1.9	3.9	3.6	3.7	3.7
	中学女子	—	—	1.8	3.0	3.0	4.2	4.7	4.5

極化が同時に進行している。

今後の課題として、青少年の性行動におけるこれらの変化について、第１に、分極化をともなった全体的な性行動の不活発化の要因を解明する必要がある。このためには、青少年全体がどのような層に分化しており、どの層において著しく性行動の経験率の低下や性に関する消極化が進行しているのかを明らかにする必要がある。

第２に、性行動の経験の有無やそのタイミングに対する青少年層をとりまく諸要因の検討が挙げられる。例えば苫米地（2018）や林（2018b）では、家庭環境によって性行動が促進されたり抑制されたりすることが示されているが、その新たな様相について検証していく必要がある。また学校環境や性教育のあり方にも着目する必要があるだろう。これらの課題については、2019 年夏に刊行される『「若者の性」白書――第８回青少年の性行動全国調査』（仮）にて詳しく論じることとしたい。〉

上の付表は、第１回から第８回までのデート経験、キス経験、性交経験の推移を集計したものである。

◆講演②◆

性行動と性規範・ジェンダー規範との関連性を探る

活水女子大学の石川由香里教授は、若者の性行動の経験率低下の背景について分析を行っている。石川氏は、講演の冒頭、次の様に語っている。

「経験率が上昇するにせよ下降するにせよ、その理由は若者の変質、端的には彼ら・彼女らがどのような性行動を容認しているかという性規範、あるいは性に対する興味にかかわる性意識が、高まっている、あるいは低下している結果として解釈されることが少なくない。だが青少年の性行動に変化をもたらしているのは、本当に彼らの性意識や性規範だといえるのだろうか。そもそも、それらに大きな変化はみられるのだろ

性交してこなかった理由（複数回答）

	高校生男子	高校生女子	大学生男子	大学生女子
1 位	相手なし	相手なし	相手なし	相手なし
2 位	早すぎる	早すぎる	早すぎる	早すぎる
3 位	理由なし	性的欲求無し	理由なし	妊娠不安
4 位	妊娠不安	妊娠不安	性感染症不安	性的欲求無し
5 位	性感染症不安	理由なし	めんどうくさいから	性的嫌悪

うか。この報告では、まずその点を確認することから始めたい」。

石川氏は、まず「若者の性規範に変化は見られるのか」という観点から、「愛情がなくてもセックスすること」への否定（愛情規範）、「お金や物をもらったりあげたりしてセックスすること」への否定（売買春否定）、「恋人がいるのにその人以外とセックスすること」への否定（モノガミー規範）などの性規範は、大学男子も含め非常に強い規範として保たれている。このように性規範に変化がない以上、それだけで性行動率の変化を説明することはできないという。その一方で、多少の揺り戻しはあるものの全体として低下したといえるのが、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」(性別役割規範）というジェンダー規範に変化が見られることを示唆した。

性交経験を避ける理由

今回の調査票には、これまでとは異なる新たな質問事項が盛り込まれている。その１つが、これまで性交を経験してこなかった理由について、ダイレクトに問う質問である。その結果を学校種別・男女別に上位５位までまとめたものが上の表である。

いずれのカテゴリーにおいても「相手がいなかったから」という回答が最も多く、大学生では男女とも７割ほどが選択している。回答者の状況を詳しくみると、大学女子ではデート経験があるうちの半数がこの回答を選択している。そればかりでなく、「現在付き合っている人」がいる場合であっても、大学生男子の 40%、大学生女子の 31.8%が選択していた。ところが高校生で選択しているのは、付き合っている相手のいる男子では 20%、女子は 10%にとどまる。つまり高校生よりむしろ大学生が、性交経験に踏み込むことに対してより慎重な態度を示していることになる。

では、彼らは性的欲求を感じていないのだろうか。性的欲求との関連については、現在付き合っている相手がいるケースのうち、「性的欲求がない」を選択している割合は高校生女子で３割、大学生女子は２割にとどまる。したがって、性的関心経験率については低下が目立つものの、そうした欲求の低下を性交経験率低下の第一の理由とするのは適切とは言えない。つまり付き合っている相手がいたとしても、経験するのは「現在ではない」と思わせるような、何らかのブレーキが存在することが示唆される。

ブレーキの１つとして考えられるものとして、いずれのカテゴリーでも２番目に多い理由となっている「年齢的に早すぎると思ったから」をあげることができる。これを選択していたのは、性交経験のない高校生男子のうち 35.7%、高校生女子 41.4%、大学生男子 18.9%、大学生女子の 25.6%であった。ただし「結婚までは経験するべきではない」とする純潔志向は、最も高い高校生女子でも 13.5%にとどまっている。調査概要において、1970 年代以降に最も変化した性に関する意識は「婚前性交」であると述べられているが、これはそれと符合する結果といえる。

前回までの調査結果の分析において片瀬一男氏は、リスク意識を妊娠懸念と性感染症懸念として規定していたわけだが、性交しなかった理由の５位までに妊娠不安が入っているのは女子のみで２割程度であり、逆に上位５位までに性感染症不安が上がっているのは男子のみで１割程度にとどまる。いずれにせよ性交経験率の低下を説明する理由としては、これらも十分とは言えない。これを第２位に上がっている「年齢的に早すぎる」とあわせて考えてみると、実は別の様相が浮かび上がってくると石川氏は分析する。

石川氏の分析の詳細は省くが、その結論を紹介する。石川氏は、「青少年の性行動経験率低下と、性規範・

ジェンダー規範との関わりを検証してきた結果、性行動経験を押しとどめている意識として、２つの事柄が示された」という。それは、以下の２点である。

①若者たちの経済的自立意識の強さ

1990 年代の終わりから 2000 年代に生を受けた世代は、不景気の時代に育ってきた。近年、株価をはじめとする名目経済は活況を呈していると言われるが、生活実感は伴わない。大学生は生活費のためのアルバイトに明け暮れ、将来の奨学金の返済ものしかかっている。これは晩婚化を招いているのと同じメカニズムが恋愛においても働いている。とくに大学生においては男子よりもむしろ女子の方に経済的自立意識が高い傾向がみられた。

②愛情規範の強さ

「愛情がなくてもセックスすること」への否定である愛情規範が最も強いのは、初体験の相手と関係を続けている場合であるが、高校生男子ではそれ以上に性交経験のない場合に強い。

石川氏は、「愛情規範は、性情報を取り入れないことで守られていた。そのなかで学校からの性情報だけは、愛情規範を強める方向に働いていたことは興味深い結果といえる。というのもこれは学校における性教育の内容が、他の情報源からのものと大きく異なっている可能性を示唆しているからである。したがってこうした学校における性教育の特徴と機能について改めて検討していくことが、次の課題といえるだろう」と講演を締めくくられた。

◆講演③◆
青少年の性的被害

弘前大学の羽渕一代教授は、「青少年の性的被害」について講演された。講演の冒頭で「性被害の捉え方」を問うている。

「一般的に、性的被害の傾向について女性が男性よりも被害率が高いという認識は統計的にも実感としても妥当性がある。しかし、このような統計的な傾向について確認する度に事実としては正しいと認識しつつも違和感をぬぐうことができなかった。なぜなら、男性と女性の被害率を比べることにどのような認識利得があるのか、よく理解できなかったからである。つまり、男性よりも女性が被害にあう確率が高いという点を考慮して女性への注意喚起を促す、男性よりも女性に配慮するという発想は、男性の被害について結果として看過することにつながるのではないかという危惧を抱かざるをえないからである。

このような違和感は、経年比較や単純集計における率についても同様にある。細かい分類を無視して性的被害の全体について、前回調査からより増えた、もしくは減ったということについて確認したところで、それは何のために行っているのか説明をつけることができない。少なくとも統計的に非常にレアであることや減少しているということを確認することに、被害防止や学術上の意味について、どのような貢献があるかどうしても合点がいかない。

つまり、暴力発生率が低率であろうと低下傾向にあろうと、被害者がいるかぎりそれは重大な問題であると認識することが正しいように思えるからである。単純な集計のみを数値として捉え、被害が低率であるということや男女の比較、経年比較をしたところで意味を見出すことが難しい。対策を講じる側の視点からみれば、増減に意味はあるだろう。しかし、犯罪率が、減少している、低下している、例外的なものである、というような数的な表現は、犯罪についての誤解を生む可能性があるということを指摘しておきたい。つまりレアケースであるがゼロではないということを確認することや、その結果を実数として考えてみることに、意味のある数的実感をもたらすのではないか、さらに属性ではなく行動や環境との関連を探究することに意味があるのではないかと主張したい」と述べたうえで、主に「どのような行動や環境が性被害と関連するのか」という視点からの分析結果を報告された。

羽渕氏は、2017 年度の第８回調査データに絞って分析している。第８回調査においては、高校生で 21.6%、大学生で 31.8%が付き合っている人以外から何らかの性的暴力を受けた経験がある。これらをあわせて 26.6%が性的暴力を振るわれた経験がある。４人に１人が性被害を受けたことがあると回答しているということは、学生生活の中で性的暴力が珍しいことではなく、全国で相当数の高校生が何らかの性的被害の

経験があるということになる。

高校生女子の被害率は性的行為の強要以外はおおよそ１割、１割という数値は10人いたら１人はいると考えるならば、１クラスに２～３人程度はいるということを示しており、全国で無視できない数の高校生女子がこのような経験があるということになる。

高校生男子についても、女子より少ない被害率につい目を奪われがちになるが、１％から３％程度の被害率であり、最も低率である「性的行為の強要」(1.3%)で計算しても２万人程度となる。このように考えるならば、性被害の低率という表現には重大な問題があり、時系列で比較することやジェンダーその他の属性で比較することで被害者のステレオタイプ化を促すことには問題があると言わざるを得ないという。

付き合っている人からの暴力被害について、高校生では16.1%、大学生では20.9%が何らかの被害経験がある。これらを平均するならば、性被害経験率は18.5%にもおよぶ。友だちとのつきあいの干渉や精神的暴力の率は男女ともに１割を超えている。また性的行為の強要や身体的暴力も看過できない数である。性的行為の強要という過激な暴力であっても、日本全国で実数を推定するならば、男女ともに数万人という被害者がいるということになる。

パーセンテージで考えるならば低率に思えるような結果でも実数で考えれば、深刻な事態だと重く受け止めることができるのではないだろうかといい、被害経験者の存在を確認できたことから、これらの問題を解決や防止対策は急務であるし、また学生たちのとりまくジェンダー的な権力関係などの環境について確認することが重要となってくるだろうという。そのうえ属性による分析には積極的意味が見いだせないと考えているが、被害学生たちの行動や環境について明らかにすることには意味があるだろうともいう。

羽渕氏は、若者の行動、それからとりまく環境とどのような関連がみられるのか、可能な範囲で分析を行ったと述べ、性的な関係にあると目される恋人（付き合っている人）からの性被害とそうではない人からの性被害を分けた分析結果を、レジメで次の様にまとめている。

〈付き合っている人以外から性暴力を受けた経験のある学生は、行動範囲が広く、活動場所が多いことが推測される。このように活動場所を広く保持する理由について、現在の家庭や友人関係のイメージが悪いこととの関連が推察可能である。家族や現在の友人関係に不満もしくは不安があり、新たな人間関係を模索する志向があるために行動範囲が広くなる傾向があると解釈も可能である。

付き合っている人からの性暴力を受けた経験がある学生も、親密な人間関係がそもそも悪いのではないかという解釈である。被害経験のある学生は、親との会話が少なく、家庭のイメージが良いと回答する率も低い。この二つの結果について検討する際、素直に解釈すれば、付き合っている人以外からの被害と付き合っている人からの被害とでは状況が異なるようである。付き合っている人以外からの被害でいえば、親密な人間関係が良好とは言えず、新たな人間関係を開拓するため行動を広げることで性暴力に遭遇する可能性がある。他方、付き合っている人からの被害は、男女で異なるようであった。女子学生は、友人関係との相関がみられるが男子学生にはそういった傾向はみられなかった。

女子学生に限っていえば、付き合っている人からの性暴力に関わり、友人の性的行動や経験がどの程度気になるのかという、ピアグループ内部での性的意識について関連する結果が得られた。被害経験のある学生のほうがない学生と比較して友人の性的な行動や経験を意識しているという結果となった。それとともに、友人と性の問題について話していると回答する率も高く、友人関係の中で性的な事柄を共有している、もしくは文化を醸成している可能性が高いことが示唆された。

個室の有無との関係からも仮説が立てられる。親との会話が少なく、個室をもち、ピアグループの中で性的な問題について考え対応しようとする傾向と性被害が関連するのではないだろうか。そして、このような学生の友人関係の中では、ある種のジェンダー規範が内面化されている可能性も示唆された。〉

調査データの解説は紙幅の関係で省略した。詳細は、今年の夏に刊行される予定の『「若者の性」白書――第８回青少年の性行動全国調査』を参照されたい。なお、講演で発表されたデータについては、レジメに掲載されているので、必要な方は日本性教育協会の事務局宛（メール　info_jase@faje.or.jp）にお問い合わせいただきたい。

◆講演④◆

性教育はどう役に立っているのか

兵庫教育大学大学院の永田夏来講師は、性教育に対する評価と既習数に関する分析結果を発表した。

今回調査において、高校生で学校の性教育で教わった事柄が自分にとって「役に立つと感じた」と回答した者は男子 38.3%、女子 44.8% であり、「非常に役に立つと感じた」(男子 11.1%、女子 9.5%) を合わせると男子 49.4%、女子 55.3% と半数程度の生徒が学校の性教育を「役に立つ」と肯定的に評価している。

学校の性教育を「役に立つ」としたかどうかについて、男女と性に対する関心の有無で区別した結果、男子「関心あり」の場合、「役に立つ」としたものは半数以上の 54.1% である。残りを「役に立たない」と「わからない」がほぼ均等に分けあっており、それぞれ 22.4%、23.6% となっている。また、男子「関心なし」においてはもっとも多いのは「わからない」の 43.3% であった。女子「関心あり」の場合、「役に立つ」としたものは 63.7% でもっとも多い。「役に立たない」16.3%、「わからない」20.0% となっており、男子同様に「関心あり」の場合、学校での性教育を「役に立つ」と評価していることがわかる。しかし「関心なし」は男子と異なっており、「わからない」ではなく「役に立つ」が 48.2% でもっとも多い結果となった。男女ともに性に関心が高く、知りたいことが多い状態にある者にとって学校の性教育は「役に立つ」と評価されている。ただし関心がない場合には男女差があり、男子は評価を留保する「わからない」が多くなるが、女子は関心がなくても「役に立つ」と評価するものが半数程度いる。

「役に立つ」との評価が半数程度であるという状況はこの 12 年間維持されており、男子では 51.0%、44.8%、49.4% と第 6 回調査（2005 年）から第 8 回調査（2017 年）で 1.6 ポイントの減少があるがほとんど変化していない様子がわかる。女子の変化はさらに少なく、55.0%、53.4%、54.4% である。

既習数と「役に立つ」の関係

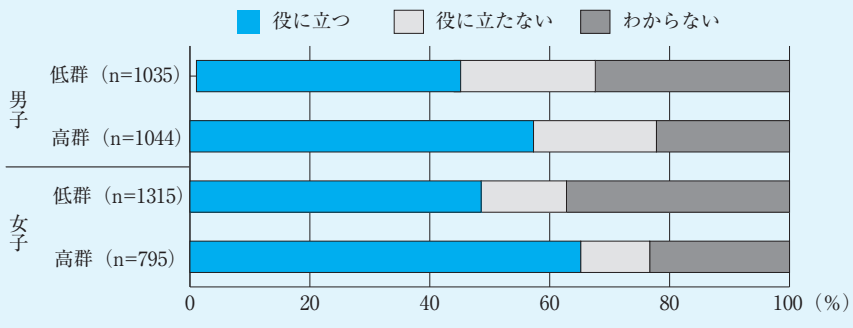
永田氏は、学校における性教育の既習数と「役に立つ」との関係を分析した。既習数とは、学校における性教育の学習内容の有無を問うた数で、今回の調査では 18 項目。ただし項目 18 番は「特に教わったことなない」でカウントしていない。

今回の調査では、最小は 1、最大で 17、平均 8.36（男子 8.51、女子 8.23）で男子にやや高い傾向がある。これを 2 群に分け、既習数 1 ～ 8 を「低学習群（低群）」、既習数 9 ～ 17 を「高学習群（高群）」。

高校生における男女別の既習数と性教育への評価では、男子において「役に立つ」と答えたものは低群 37.1%、高群 57.3% で高群の方が 20 ポイント多くなっている。女子も同様に低群 45.2%、高群 62.8% と 20 ポイント以上の差で高群において性教育を肯定的に評価する者が多い。

また、性に対するイメージに注目して既習数との関係を検討した結果、性について「楽しい」と答えた者は、男子低群で 70.8%、高群で 79.1%、女子では低群で 41.4%、高群で 56.8% と、多くの項目を学習している者が男女ともに性に対して肯定的なイメージを持っていることがわかる。「きれい」も同様で、男女ともに高群の方が低群よりもポジティブなイメージを持つことが示されている。

高校生における男女別の既習数と性教育への評価



既習数と性のイメージ

	男子		女子	
	低群	高群	低群	高群
楽しい	70.8%	79.1%	41.4%	56.8%
きれい	22.4%	26.9%	13.5%	18.0%

今回の調査では、性に関する知識を問う問題として「a）膣外射精は確実な避妊方法である」、「b）排卵はいつも月経中におこる」、「c）精液がたまりすぎると、身体に悪い影響がある」、「d）性感染症を治療しないと、不妊症になることがある」、「e）日本ではこの10年間、新たにHIVに感染する人とエイズ患者は減少し続けている」、「f）ピルの避妊成功率はきわめて高い」、「g）性感染症にかかると、かならず自覚症状が出る」の7項目を提示し、この文章の正誤を問うという形で性に関する知識を測った。

高校生における「a）膣外射精は確実な避妊方法である」の正答率は全体で男子54.6%、女子43.9%である。しかし男子高群は61.5%、女子高群は52.9%と男女ともに全体よりも高い正答率を示している。なお、男子低群の正答率は31.6%、女子低群は40.9%となっている。男女ともに高群の正答率が高く、低群に正答率が低いという状況が共通しており、既習項目が多い方が性に関して正確な知識を持ち得ているという状況を確認することがでたという。

◆特別講演◆

北京・上海・広州の青少年の性意識と性行動調査

特別講演は、上海社会科学院社会学研究所の楊雄所長（通訳:上海社会科学院社会学研究所の裘暁蘭研究員）。

上海社会科学院社会学研究所は、中国青少年研究センター児童少年研究所、広州香港マカオ青少年研究所と共同で上海、北京、広州、三都市の15～24歳の中学生、高校生および大学生5335人を対象に、アンケート調査を行った。質問票は、中学生用、高校生用、大学生用の3種類で、調査内容は性意識、性行動、性教育と性知識など。

性意識と性行動の変化を分析するために、1989年、1999年、2004年の3回の調査と経年比較も行っている。

以下、調査結果の概要を列挙する。

①性の生理的発達が「低年齢化」しつつある

今回の調査によれば、精通の平均年齢が13.03歳、初経の平均年齢が12.21歳だった。2004年に比べると、精通の平均年齢が0.44歳早まり、初経の平均年齢が0.49歳早まった。経年比較でみると、3都市の青少年の性生理の発達が早くなっていることがわかる。

②初めて異性と付き合った年齢が遅くなっているが、意識が開放的になっている

初めて異性と付き合った平均年齢は男子13.87歳、女子13.98歳で、今までの調査において最高数値を示した。なお、全体的にみると、初めて異性と付き合った年齢が遅くなっている傾向がみられた。

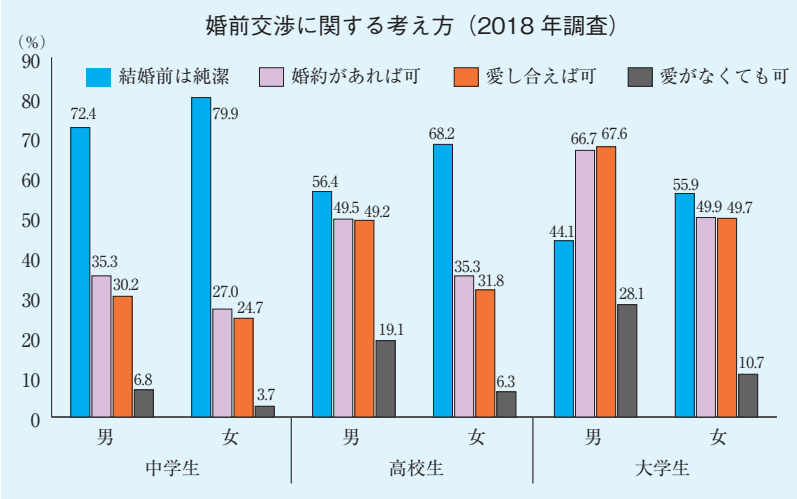
一方、異性との付き合いに関する意識が開放的になっている。異性との付き合いの行動について、「集団での付き合い」、「二人だけで映画を見る」、「互いに手紙を書く」、「デート」、「手をつなぐ」、「二人での旅行」、「キス」、「愛撫」、「性交」を挙げたところ、許容度が高くなっていることがわかる。例えば、「キス」に対し、「許せる」、「まあ許せる」と回答した割合が、1999年の11.1%から、2004年12.6%、2017年21.4%と年々増えていく傾向がみられた。

③性に対し、積極的、プラスのイメージが主流となっている

性に対するイメージを聞いたところ、「楽しい」、「美しい」に対し、「全くそう思う」、「まあそう思う」と回答した割合はそれぞれ58.0%と58.2%で、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」と回答した割合は5.1%と5.5%となっている。「責任」に対し、「全くそう思う」、「まあそう思う」と回答した割合が64.3%で、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の割合が6.9%だった。性に対し、積極的、プラスのイメージをもっている若者が主流を占めていることがわかる。しかし、「嫌い」と思っている者が8.5%、「汚い」と思っている者が8.6%もいることは注目すべきである。

④婚前性交渉に対する意識が寛容的になっている

青少年は婚前の性行為に対し比較的に寛容な態度を持ち、同時に顕著な性別と年齢の差を示している。調査によると、年齢があがるにともない、青少年は「結婚前に、純潔を守るべき」の肯定率（「全くそう思う」+「まあそう思う」）が低くなっている。一方、「婚約



があれば、セックスしてもいい」、「愛し合えば、セックスしてもいい」、「愛情がなくてもセックスしてもいい」に対し、「全くそう思う」、「まあそう思う」と回答した者の割合は年齢があがるにともない高くなり、また男子が女子より高くなっていることがわかった。情報社会の進みにより、意識が開放的になり、若者が性に対し寛容的になっていることがわかる。同時に、伝統的な性意識は依然女性に対する影響が強いこともうかがえる。

⑤高校生の「恋愛」が一般的になっている

今回の調査によると、４割強の高校生がすでに人生の初恋を経験したことがわかる。具体的に見ると、恋愛経験があると回答した者の割合は中学生 10.6%、高校生 42.3%、大学生 56.3%となっている。

⑥性行動が先送りされている

高校生では、性交経験率は都市部と農村部がそれぞれ 8.6%と 10.9%で、差が小さいものの、大学生になってから都市部の経験率は 15.6%まで増加している。一方、農村部の高校生（10.9%）と大学生（9.1%）の経験率に大きな差がみられなかった。都市部の若者の性行動が「遅咲」していることがわかる。

⑦性の悩みに直面するとき、インターネットが最も重要な解決ルートとなっている

今回の調査では、性の悩みに直面するときに、もっとも頼っているのがインターネットであることが明らかになった。性の悩みがあるとき、主にネット（ソーシャルソフトを含む）を利用して解決すると答えた割合は 23.6 %だった。「学校のカリキュラム」を選んだ者の割合が 14.3 %、「友達・クラスメート」が 12.6 %だった。

⑧多くの家庭では子どもの性に関する質問を正面から対応している

子どもの性に関する質問に対し、「きちんと答えてくれる」、「選択して答えてくれる」と回答した割合は、父親と母親でそれぞれ 59.1%と 63.6%、「避ける」、「かえって叱られる」と回答した割合が、父親と母親でそれぞれ 34.8%と 28.6%となっている。また、6.2%の父親と 6.1%の母親は子どもの性についての質問に答えられない結果だった。

また、一人っ子の親、高学歴の親が子どもの性についての質問により積極的に対応することがわかる。子どもから性に関する質問をされた時に、「きちんと答えてくれる」、「選択して答えてくれる」と回答した一人っ子の父親が 63.5%、母親 69.8%、非一人っ子の親より８%と 7.8%高い。

同時に、学歴が高い親ほど、きちんと答える傾向を示している。例えば、「きちんと答えてくれる」と回答した割合をみると、修士以上の学歴を持つ父親が 78.7%、母親が 82.9%で、中学校以下の学歴を持つ親より 28.5%と 25.9%高くなっている。

上海社会科学院社会学研究所の楊雄所長は、「社会の発展に伴い、中国の青少年の性意識が大きく変わり、開放的になっている。一方、現実では、性にかかわる知識への獲得は依然として自分で探すことが多い。性教育の欠如が益々問題となっている。青少年の健康的な成長を守るために、学校と家庭、社会が連携し、充実した思春期性教育に力を入れることは急務となっている」と語り講演を締めくくられた。

６氏の講演後、休憩をはさんで、明治学院大学の加藤秀一教授の司会で、ディスカッション・Q＆Aが参加者との間でかわされ、約 130 名参加のセミナーは盛況のうちに終了した。

多様な性のゆくえ
One side／No side ［21］

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

改めて５つのＣを問う

世界エイズデーは1988年１月にロンドンで開かれたエイズ対策世界保健大臣会議で制定が正式に決まり、その年の12月１日には第１回のイベントが世界各地で行われた。

参加規模はそれほど大きくなかったと思うが、日本でもさっそく第１回時点から国内向けのポスターが作成されている。《愛している人にうつしてはいけない》というキャッチコピーのもとに、全裸で手をつなぐ男女の後ろ姿を大きく扱ったポスターだった。

いま見ると「ちょっとこれはないね」と個人的には思う。だが、当時の自分はどうだったのか。

後ろ姿とはいえ全裸の男女である。したり顔をして「お役所としては大胆に踏み込みましたね」といった程度の評価はしていたかもしれない。メッセージが異性間の性関係を前提視していることにも違和感は持たなかった。いまさらながら反省しきりである。

厚生労働省の委託を受けて公益財団法人エイズ予防財団が運営する啓発サイトAPI-Net（エイズ予防情報ネット）には歴代の世界エイズデーのポスターとテーマの一覧が掲載されている（下欄外アドレス参照）。

発表当時から「これはないだろう」と強い批判にさらされてきたポスターやテーマもあれば、逆に何のインパクトもないと無視されてしまったものもある。そうした負の評価の記憶も含め、日本エイズ対策史の一面をうかがわせる資料といえるのではないか。

30周年の節目を迎えた2018年世界エイズデーでは７月に国内啓発キャンペーンのテーマが『UPDATE! エイズ治療のこと HIV検査のこと』に決まっている。

また、国連合同エイズ計画（UNAIDS）が９月に発表したテーマは「Know your status（感染の有無を知ろう）」だった。

抗レトロウイルス治療によってHIVに感染した人の体内のウイルス量を低く抑えることができれば、その人自身がエイズの発症を防ぎ、感染していない人と同じくらい長く生きていくことが期待できるという。同時に、その状態を維持していれば、他の人に性行為でHIVが感染するリスクは実質的にゼロになることも複数の大規模研究報告で確認されている。

早期のHIV検査を呼びかけ、感染していることが分かったに人はできるだけ早く治療を開始することを勧める。そこには多くのメリットがありますよというメッセージを通し、HIVに感染している人たちに対する社会的なスティグマや差別の解消もはかる。表現は異なるものの、治療の進歩を踏まえてメッセージを発信しようとする姿勢は、国内向けのテーマにも、世界のテーマにも共通している。

世界エイズデーの10日ほど前にUNAIDSが発表したポスターや絵はがきなどのキャンペーン素材には、テーマとともに『LIVE LIFE POSITIVELY（ポジティブに生きよう）』というフレイズも加えられた。

《治療の進歩→早期検査→陽性者としての生活の充実と予防への効果》というメッセージをより明確に示すものだが、キャンペーンでは同時に検査普及に伴って重視すべき「５つのＣ」も改めて強調している。

Consent（同意）、Confidentiality（個人情報保護）、Counselling（カウンセリング）、Correct results（正確な検査結果）、Connection（予防、治療、ケアのサービスへの接続）の５つ単語の頭文字で、HIV検査実施の基本原則といっていいだろう。

とくに最初のＣには注目したい。

《HIV検査を受けるかどうかは本人の選択です。検査機会はすべての人に保障されなければなりません。ただし、検査を受けるかどうかは個人の自発的な判断に基づくものであることが大切です。HIV検査を勧められた人にはインフォームドコンセントが必要になります》

治療の進歩はキャンペーンのテーマにも大きな変化を促してきたが、それでもなお、検査を義務付けたり、強制的な検査を実施したりすることを正当化する理由にはならない。HIV/エイズ対策の経験の蓄積を踏まえ、この点を再確認しておくことも、いまは大切だと思う。

http://api-net.jfap.or.jp/event/aidsday/aidsday_poster_poster.htm

思いこみのめがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義　Suzuki Shigeyoshi

公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

第10回
「失敗した話を聞かせて欲しいです」
先生も失敗する

2019年になりました。昨年からこの「思いこみのめがね」を書いています。このコラムを読んでくださっているみなさんに感謝いたします。もしよろしければ、今年も読んでいただけると幸いです。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

４月からのコラムを読み直し、ふと「何だかカッコいいことばかり書いているなあ」と思いました。新年の始まりにどうかと思いましたが、失敗談から今年のコラムをスタートさせます。

というのも10年位前に、とある教育研究会で講師をしたときのことでした。受講後のアンケートにある先生から、「いろいろなお話を聞いてとても勉強になりました。ただどれもいい話ばかりで、自分に同じような実践ができるかどうか少し落ち込みました。今度は（シゲせんせーの）失敗談が聞きたいです」という感想をいただきました。

失敗談を共有することも大事なんだなあと、そのときに思いました（そういえば子どもたちも私の失敗談を食い入るように聞いていました）。

失敗談①　初めて勤務した小学校で、私は体育主任を務めていました。体育の授業や行事にかかわることで、リーダーシップを取る必要がありました。全校での体育朝会の運営もしていました。運動会が近づくある日、体育朝会でラジオ体操に取り組みました。私が朝礼台の上に立ち、子どものころから自分がやってきたラジオ体操をお手本として示しました。それで大丈夫だと思い込んでいました。

体育朝会が終わってから、校長先生に呼ばれました。「シゲせんせー、ラジオ体操のやり方はきちんと勉強したかい？　子どもの前では、正しいことを教えないといけないよ」と言われました。子どものころからラジオ体操をやってきたからといって、適当に取り組んだ自分が恥ずかしくなりました。

失敗談②　４年生の担任をしていたときの話です。忙しい日々の中で、授業の準備がおざなりになることがありました。授業の準備をしていなくても、何とかなるさと思い込んでいました。教師用の教科書には授業のポイントも、算数の計算問題の解答も、すべて書いてあります。それを見ながら授業をしていました。しかし、それでは子どもの反応や自分が授業で伝えたいことが、はっきりしないまま授業をすることになります。当然、授業は上手くいきません。ダメダメな授業をやったときに子どもから「シゲせんせーがちゃんとわかってないとダメじゃん！　しかも先生は答えを見ながらやっているし！」と言われました。きつい一言でした。それ以来、例えば算数の授業の前には、子どもに取り組ませる問題には、予め自分でも取り組むという習慣ができました。いま考えると、当然のことだなあと思います。

失敗談③　６年生を担任しているとき、ある子が休み時間にスクールカウンセラーのいる相談室にこっそり入っていくのを見かけました。「子どもは何かに悩んだら、必ず担任の先生に相談に来るはず」と思い込んでいた私は、ショックを受けました。「自分は子どもから悩みを相談されない先生なのか」と落ち込みました。そのことを先輩の先生に相談したところ、「それって落ち込むことかな？　子どもがいろいろな人を見極めて、誰に何を話すか考えている証拠だよね。とても良いことじゃないか」と笑われました。

確かに！確かにその通りでした。東京大学先端科学技術研究センター准教授である熊谷晋一郎先生が、「依存先を増やしていくことこそが、自立なのです」とおっしゃっていますが、それは子どもにとっても同じことでした。

このコラムの５月号でも書いた通り、私の失敗の近くには、いつも「思いこみのめがね」があったような気がします。

今年も気を引き締め直して、いろいろなことに取り組んでいきます。「失敗を恐れずにチャレンジしよう」と子どもに言うたびに、自分のことを振り返るのでしょう。ああ、でもなるべくは失敗したくないなあ（笑）。

［千葉県立姉崎高等学校］（下）

授業で講座の事後指導、学習効果を高める性教育の取り組み

千葉県立姉崎高等学校では、人権教育の一環として「デートDV」をテーマにした講話を始め、次年度には「エイズ・性感染予防教室」にテーマを広げ、その後、デートDVと性感染症についての実施行事を交互に行ってきた。今回は、講座後に行った生徒へのアンケートの結果を中心に、今後の課題についても紹介していきたい。

反応がよかったデートＤＶ防止の講習会

平成28年度に3年生を対象に行った人権啓発行事「デートDVってなに？」では、デートDVについての知識を学ぶとともに、生徒代表と教師によるロールプレイが行われた。

性教育に関する実施行事を主催する生活安全部の木村恭子教諭（家庭科）は、「ロールプレイは生徒会と若い先生方が協力して演じてくれました。身近な人が行うロールプレイでしたから、生徒たちは大いに沸いて、かつ真剣に学んでくれました」と話す。

講座のあとに行ったアンケートによると、女子生徒は実に100%が「講座を受けて“デートＤＶ”の言葉の意味がわかった」に〔はい〕と答えている（男子96%）、また「デートDVが、相手を支配することだと」いう設問にも女子は100%が〔わかった〕(男子96%）と答えていた。

理解度については、男子のほうが若干少ない。しかし男女間の差は僅かである。多くの生徒が関心を持って「デートDV」の授業に取り組んだことがわかる。

有意義だった性感染症・エイズの講話

平成27年度、29年度に行った「エイズ・性感染症予防教室」についても、学ぶものが大きかったという。

木村教諭は、「たとえば、平成29年度の生徒へのアンケートでは、エイズ・性感染症について7割の子どもたちが中学時代に勉強したと答えていますが、『今回の講座で初めて知った内容がある』と半数以上の生徒が答えているのです」と話す。

千葉県立姉崎高等学校
校長　小野　央
生徒数　476名
教職員数　37名
（2018年11月現在）

今回の講座で初めて知った内容について、アンケートで回答の多い順に紹介すると、

①（HIV検査は）保健所で匿名、無料で検査が受けられることや相談ができること。
②エイズ予防にコンドームが有効であること。
③（ＨＩＶ）エイズの治療方法が進化していること（服薬が1日1錠でよいことなど）。

があがった。

また、近年、梅毒感染患者が増えていることやエイズ以外の性感染症についての話も多くの生徒にとっては初めて知る内容だったと述べている。

生徒の感想では「あらためて性感染症の怖さを知った」、「相手に対しての思いやりというのはとても大切なことだと思った」などの声が多く、木村教諭は講話の内容が生徒たちに浸透していることを感じ、あらためて性教育の意義を感じたという。

また教職員からも「現場の医師による最新情報やデータは説得力があり、生徒もよく聞き、非常に役立った」、「予想以上に生徒が集中して聞いており、感想をみても教育効果があったと思われる」、「ほとんどの生徒が集中して聞いており、感想についても自分に置きかえて考えられた内容がうかがわれた」など教育効果があったと感じた教諭が多かったと語る。

【姉崎高等学校における授業での性教育の取り組み】

● １年生　体育科　保健

学習項目	学習内容や学習活動
現代社会と健康	現代の感染症：新興感染症や再興感染症の原因や問題点について、学習し、理解する。
	感染症の予防：感染症の予防の原則とそれにもとづく対策について学習し、理解する。
	性感染症･エイズとその予防:性にかかわる感染症の問題点や対策について学習し、理解する。

● ２年生　体育科　保健

学習項目	学習内容や学習活動
生涯を通じる健康	思春期と健康：思春期の心と体の健康を学習し、理解する。
	性意識と性行動の選択：性意識の男女差と性的欲求や性に関する情報と性行動を学習し、理解する。
	結婚生活と健康：心身の発達と健康な結婚生活や家族の健康を学習し、理解する。 妊娠・出産と健康：受精、妊娠、出産と妊娠・出産期の健康を学習し、理解する。
	家族計画と人工妊娠中絶:家族計画の意義と避妊法の選択や人工妊娠中絶を学習し、理解する。

● ３年生　家庭科　家庭総合

学習項目	学習内容や学習活動
自分らしい人生をつくる	家族・家庭をみつめる／これからの家庭生活と社会：日本の家庭を取り巻く現状について学習し、家庭の機能と家族関係を理解する。また、ワークシートを使って、家族と法律についての知識を整理し、これからの家族のあり方について考察する。

講話後は、授業で事後指導を行う

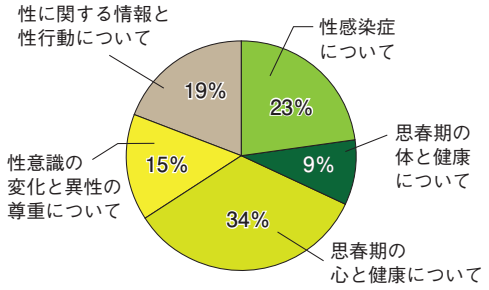
せっかく中学時代に性教育を学んでも、学習内容が印象に残らず忘れてしまう生徒が多い。今回のように「学びが多かった」という感想が多く寄せられても、ときがたてば生徒たちは忘れてしまうのではないか――そう考えて、昨年からは保健体育科と家庭科の授業の中でも、講座の事後指導を行って学習効果を高める試みをしている。

「たとえば家庭科の授業の中でも今、人権問題を取り上げていて、家族の人間関係という中でドメスティックバイオレンスを防止していく内容などが盛り込まれています。DV 防止法や児童虐待防止法など家族にも関係するトラブルは、家庭科の家庭総合の単元の『家庭に関する法律』で必ず取り上げます。DV 防止の講演会のあと、授業でも取り上げて生徒たちに考えさせていく。家庭科だけで教えるよりもやはり生徒の理解度が深く、講習会による学習効果が実感できます」と、木村教諭は話す。

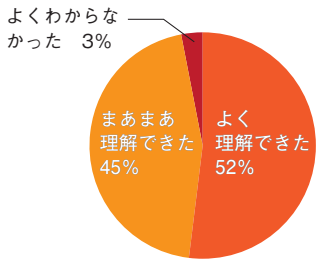
本年度の講座では、人権教育の一環として、より良い人間関係を構築するためのコミュニケーションスキルの一つで、「人は誰でも自分の意見や要求を表明する権利がある」との立場に基づく適切な自己主張のトレーニングを通じて、一方的に自分の意見を押し付けるのでも、我慢するのでもなく、お互いを尊重しながら率直に自己表現ができるようになることを目指すアサーションを扱うそうだが、デート DV 防止や性教育など性に関する実施行事は、毎年ではなくても２年に１回、３年に１回という形で継続的にやっていく必要がある、と木村教諭は感じているという。

人権教育から派生した性教育はどのような形で発展していくのか。今後の授業づくりに期待したい。

（取材・文　中出三重／エム・シー・プレス）



性教育で関心度の高いもの
平成28年度　2年生（152名）への
アンケート結果（保健の授業内で実施）



今回のエイズ・性感染症予防教室で、性感染症についてどのくらい理解できましたか
平成29年度　全校生徒（約480名）への
アンケート結果（講話後のロングホームルームで実施）

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

Cup Of Therapy
だいじょうぶ。

マッティ・ピックヤムサ／アンッティ・エルヴァスティ著、奥村健一訳
MUJI BOOKS
定価 1000 円＋税

関係性を見直す温かなメッセージ

表紙には、無言のままハグをするライオンとクマ。少し苦しげな、何かやりきれない気持ちを抱えているようにみえるライオンは、クマの背にまわした両手（前足）から伝わる温かさを感じているのだろう。そこに寄り添い続けるクマの表情は静かで、そこには「ふたり」の時間が流れている。

もしかしたら、クマのほうが、ライオンに支えられているのかもしれない。

イラストに添えられているのは、「言葉をかわさなくても身近なひとの思いやりを近くに感じつつゆったりと過ごすことに 意識を向ける方法を知ることは、とても大切です」というメッセージ。本書は、日常をふりかえり、自分自身に目を向けるひとときを与えてくれるセラピーブックである。

作者は、フィンランドのイラストレーター／グラフィックデザイナーのマッティ・ピックヤムサと、心理療法士のアンッティ・エルヴァスティ。マッティは、フィンランド・ブランド Marimekko のデザイナーでもあり、彼の絵本や原画展は日本でも大人気である。そして、アンッティは、同国 Sexpo 財団のカウンセリング部長を務めた性教育の専門家であり、2017 年 7 月に大阪で開催された第 21 回関西性教育研修セミナー（日本性教育協会協賛）の講師として来日されている。同セミナーの報告は、『現代性教育研究ジャーナル』No.78（2017 年 9 月 15 日発行）にまとめられている。

「肯定的で健康的な自尊感情とセクシュアリティを育む:フィンランドにおける性教育と家庭（親）支援」と題する講演では、本書 Cup of Therapy に掲載されることになる作品が一足先に公開され、そこに込められた思いやテーマを詳しくうかがうことができた。描かれる動物たちは、どれも私たちの身近な暮らしにあるさまざまな葛藤や軋轢、逆境やトラウマについて語りかけてくる。

例えば、子どもの情緒的・性的な発達において不可欠なアタッチメントについて。人はだれでも安心と安全を求めており、それは男子であれ、大人であれ、例外ではない。不安や傷つきに対して、性的ではないタッチや触れ合いは、とても大切なものである。「僕たちは、ハグするほど男らしい」というメッセージには、ブラザーとロマンスをかけ合わせた造語である“ブロマンス（Bromance）”のキーワードが添えられる。

真の強さとは、「筋肉」でもなければ「ペニスのサイズ」でもなく、「感情を表すことを恐れないこと」だと伝える著者らは、あらゆる感情が人を育み、人生を豊かにしてくれるものだと教えてくれる――たとえ、それが離別や喪失、HIV 感染、暴力、性虐待、トラウマであったとしても。

深い悲しみやつらさを感じるとき、だれかがそばにいてくれること、一杯の温かい飲み物を差し出してもらえるだけで、〈愛されている〉と思い出すことができる。自分と他者との境界線を知り、自分の居場所を守りながらも、同時に、勇気を持ってサポートを受ける心を開くことも必要だ。私たちは、今ここから、関係性を見直し、新たな関係性を築くことができるのだから。

摂食障害、精神疾患、不妊、子育て、多様な家族、性別にまつわる偏見、恋愛、依存症、離婚、SNS、休暇明けの日のストレス……本書の 100 のテーマには、自分につながることもあれば、身近な人やまだ出会っていないだれかを理解するものもあるだろう。さまざまな動物たちとともに、小さなセラピーの旅に出てみませんか。

（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

2月8日（金）9：00～16：10

創立30周年記念第19回九州ブロック性教育研究大会・第23回熊本県性教育研究大会

児童生徒のこころをみつめる

「人間の性」の心理的側面を中心に

内　容

基調講演『学校における性的マイノリティの児童生徒への支援の現状と課題』
生方　裕（文部科学省児童生徒課課長補佐）

記念講演『人間の性と性教育～ 30 年前と現在の若者の性を比較して～』
池上千寿子（厚生科学審議会専門委員、エイズ予防財団理事、前ぷれいす東京代表）

講　　演「思春期の子どもたちのこころに迫る～性教育題材『思春期のこころ』の実践に必要なこと～」
高岸幸弘（熊本大学教育学部准教授）

講　　演《ピアエデュケーション概論》「ピアエデュケーションの手法と性教育における可能性」
高村寿子（自治医科大学名誉教授、日本ピアカウンセリング / ピアエデュケーション研究会代表）

会　場

熊本大学工学部百周年記念館（熊本市中央区黒髪２-39-1　熊本大学黒髪キャンパス 工学部）

問合せ先等

主　催／熊本県性教育研究会　　共　催／全国性教育研究団体連絡協議会、九州ブロック性教育研究協議会
協　賛／日本性教育協会（JASE）
参加費／ 3,500 円（学生 1,000 円）　定　員／ 150 名
申込先／ https://www.kokuchpro.com/event/5f9f6f8680aa7cb757a58b04b0fe787b/
メール：hirakukaievent@gmail.com　件名に「九ブロ参加申込み」とし、①氏名、②都道府県名、③「一般」「学生」または「その他」、④所属、⑤連絡先（メールアドレス）を明記して

2019年3月10日（日）13：00～16：50

知っているようで知らない～性の健康セミナー

主な内容　あなたは分かっていますか？　女性の悩み・男性の悩み　『性の悩み』のいま

13：10～13：40　『わが国の少子化、その原因を徹底分析』
講師：北村邦夫（一般社団法人日本家族計画協会理事長・家族計画研究センター所長）

13：45～14：45　「あなたが知らない性の悩みの世界～女性編～」
講師：丹羽咲江（咲江レディスクリニック院長）

14：55～15：55　「あなたが知らない性の悩みの世界～男性編～」
白井雅人（順天堂大学医学部附属浦安病院泌尿器科准教授）

会　場　御茶ノ水ソラシティ　カンファレンスセンター２階 sola city Hall（東京都千代田区）

参加費・問合せ先等

主　催／一般社団法人日本家族計画協会
受講料／ 1,080 円（税込）
定　員／ 300 名
対　象／医師、保健師、助産師、看護師、看護教員、養護教諭、薬剤師、薬局関係勤務の方など
問合せ先／〒 162-0843　東京都新宿区市谷田町１－10 保健会館新館　一般社団法人日本家族計画協会　研修担当
TEL　03-3269-4785　URL　http://www.jfpa.or.jp

▶▶ 2月3日（日）10：00～17：00 ◀◀

第12回日本性科学会近畿地区研修会

性に関する思いと協働

内　容
- 「法律家から見た多様性の思想」東田展明（みやこ法律事務所）
- 「関西GIDネットワークの歩み」福田　亮（フクダクリニック）
- 「性同一性障害／性別違和に対する身体的治療」丹羽幸司（ナグモクリニック大阪）
- 「トランスジェンダーの理解とかかわり」康　純（大阪医科大学）ほか

会　場　梅田ガクトホール（大阪市北区梅田2-6-20　パシフイックマークス西梅田14Ｆ）

問合せ先等

問合せ先／日本性科学会（東京都文京区本郷3-2-3　森島ビル４Ｆ）
TEL & FAX：03-3868-3853　E-mail：30sti@c-linkage.co.jp

▶▶ 2月23日（土）9：30～19：30 ◀◀

第20回日本いのちの教育学会研究大会

自分らしく生きる

多様性を認める社会を求めて

内　容
- 「いのちの教育20年のあゆみ」近藤　卓（日本いのちの教育学会会長・日本ウェルネススポーツ大学教授）
- 「わたしと娘～それでも人生にイエスという～」和田芽衣（写真家・第12回名取洋之助写真賞奨励賞受賞）
- 「つながりが変える・つながりが変わる」岩室紳也（ヘルスプロモーション推進センター・オフィス岩室）
- 「自分探しと生きるということ」弓山達也（東京工業大学教授）ほか

会　場　横浜創英大学（横浜市緑区三保町１番地）

問合せ先等

参加費／会員：事前登録2,500円、当日3,000円　非会員：事前登録3,500円、当日4,000円　学生：2,000円（高校生以下無料）
問合せ先／第20回研究大会事務局　横浜創英大学看護学部　実行委員長・中山直子
TEL045-922-5641（代表）　FAX：045-922-5642
大会ホームページ https://life-education21.jimdofree.com/　E-mail：inochi20@soei.ac.jp

▶▶ 3月23日（土）～24日（日）◀◀

GID（性同一性障害）学会　第21回研究大会・総会

The next step in the next decade
法律、保険、そしてその先へ

会　場　岡山県医師会館（岡山市北区駅元町19-2）

問合せ先等

大会事務局：岡山大学形成再健外科学 事務局長：松本 洋（岡山市北区鹿田町）　TEL086-235-7214
詳しくは　http://www.convention-w.jp/gid21/

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、
この６年間でどのように変容したかがわかる。
若者の性を理解するための必須の資料！

緊急出版 !!
全国調査による
最新のデータ

青少年の性行動

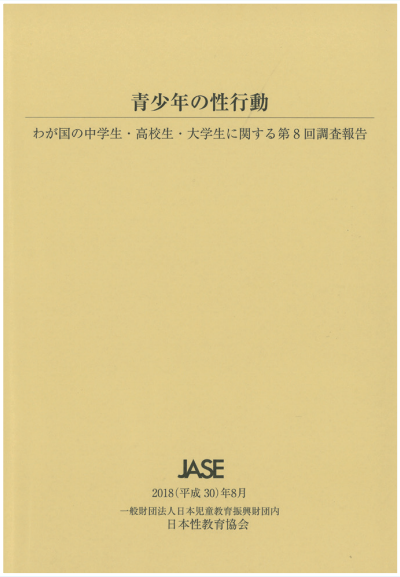
わが国の中学生・高校生・大学生に関する第８回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第８回青少年の性行動全国調査」委員会

日本性教育協会では、1974 年に第１回調査を開始し、以来ほぼ６年ごとに「青少年の性行動全国調査」を行ってきました。日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で把握することができる貴重な調査データとして国内はもとより国際的にも認知されています。

このたび、2017 年６月から同年 12 月にかけて実施した「第８回青少年の性行動全国調査」の単純集計がまとまりましたので、一次報告として刊行しました。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生・高校生・大学生の男女別集計結果が掲載されています。

※なお、今回の調査に詳しい分析を加えた報告書「『若者の性』白書 第８回青少年の性行動全国調査報告（仮題）」につきましては、2019 年刊行予定です。



A4 判　80 ページ

頒価：1,000 円

送料は別途。詳しくは JASE ウェブサイトで確認してください。

JASE ウェブサイトよりお申し込みいただけます！
https://www.jase.faje.or.jp/pub/seikoudou8.html

※インターネット環境にない場合は、JASE(電話 03-6801-9307）までお問い合せください。

●本書に関するお問い合せにつきましては、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
〒 112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B１
TEL 03-6801-9307　　FAX 03-5800-0478
Mail info_jase@faje.or.jp　URL https://www.jase.faje.or.jp

JASE